



城

第六十一回

 おおとう こじょう ふたつ やなぎ なつめ
 大塔の古城(ニッ柳城、夏目城)

～武田信玄の信濃侵攻 その遠い昔の原因～

山本 忠博

今回ご紹介するのは、長野県長野市篠ノ井に在ったと推定されている、大塔の古城です。歴史ファン多しと言えども、この大塔の古城を知る人は、まずいないでしょう。そして、この城の話の中心が戦国期前の室町時代なので、皆さんの興味を引けないことは分かっています。とはいえ、歴史上の出来事の原因を探っていくと、どうしてもマニアックな方向に行ってしまうものです。今回は、そのマニアックな話に、しばしお付き合い下さい。

 たけだしんげん しなの
 武田信玄は、なぜ信濃に向かったのか？

信玄が武田家の頭主になる(1541年)前から、武田家の領土拡大のための標的は、信濃(現長野県)でした。それは何故か？一言で言うと、強敵がいなかったからです。当時の甲斐(現山梨県)の周囲を見てみると、北東に山内上杉氏、東に扇谷上杉氏、南東に北条氏、南西に今川氏という大勢力が地盤を固めていて、おいそれと手を出せる状況にありませんでした。それに比べて北西側の信濃は、古くから守護(地方統治の役職名)の力が弱く、中小の在地領主が群雄割拠する状態でした。各勢力を各個撃破しながら侵攻するには、信濃はうってつけの地だったわけです。

それでは、なぜ、戦国時代の信濃は、守護の影響力が小さい群雄割拠状態だったのか？その遠因は、1400年に信濃の北部で起こった、大塔合戦にまでさかのぼります。

 あしかが かまくらくぼう
 足利将軍家と鎌倉公方の勢力の境界線

シリーズ城で何度か書いてきた鎌倉公方は、ご承知のとおり、室町幕府における関東支配の長です。しかしながら、これまたご承知のとおり、鎌倉公方は代を重ねる毎に足利将軍家の言うことを聞かなくなりました。

鎌倉公方の基本的な管轄範囲は、関八州に伊豆と甲斐を加えた十ヶ国です。この管轄範囲に接する信濃は、京都の足利将軍家と鎌倉公方との間の管轄の境界線でした。初代の鎌倉公方と当時の足利二代将軍は、

実の兄弟でしたから、この初代鎌倉公方の頃(1349-1367年)は京都と鎌倉の関係は良好でした。そのため、初代鎌倉公方の晩年には、鎌倉公方の筆頭家臣(関東管領)に信濃の守護を任せることになります。

しかし、良好だった京都と鎌倉の関係も、初代鎌倉公方と二代将軍が同年に亡くなった後からおかしくなり、それ以降、鎌倉公方は将軍の地位を狙いはじめます。そのため、将軍家側は、信濃を鎌倉公方に対処する最前線と位置づけて、信濃の守護職を鎌倉公方側から取り戻しました。

信濃守護の変遷

ここで信濃の守護の変遷をもう少し詳しく見ておきましょう。室町時代の信濃の守護は、はじめは将軍家側の小笠原氏でした。小笠原氏は、甲斐源氏の流れをくむ名族で、甲斐の武田氏や奥州の南部氏と祖を同じくします。もともと阿波(現徳島県)の守護の系統でしたが、足利氏に味方して鎌倉幕府を滅亡させた際の功績により、信濃の守護となりました。そこから三代続けて信濃守護に就く間に、信濃の南部から中央にかけて地盤を固めていました。しかし、三代目が若年であったこともあって、上述のとおり初代鎌倉公方側に信濃守護の職を渡しています。

その後、上述のとおり京都と鎌倉の関係が悪くなる中で、将軍家側が信濃の守護職を鎌倉公方側から取り戻して、将軍の筆頭家臣(管領)の一族を信濃守護に就け、その後にその筆頭家臣を信濃守護に就けることになります。

かなり簡単に書くところなるわけですが、室町期の信濃の諸勢力の対立関係は複雑で、実のところ守護の入れ替わりはもっとありました。室町幕府の初期は南北朝の争乱に幕府内の権力争い(観応の擾乱)が重なっていて、小笠原氏も、あっちに着いたり出戻ったりで、一定期間、信濃守護職を罷免されることもあったわけです。そうした頻繁な守護の交代と争乱の中で、信濃の中小の在地領主達は独立志向を強めていきます。その結果、

将軍の筆頭家臣が守護に就いた時点で、既に信濃は中央政権の制御が効かない状態にありました。

大塔合戦の直前

この時期の日本の最高権力者は、三代将軍だった足利義満あしかがよしみつです。将軍職を息子に譲っていたとはいえ、実質的な権力は握り続けており、室町幕府を最盛期に導いて絶大な権力を持っていました。そんな義満からすると信濃の状態は看過できないものでした。そこで彼が抜擢したのが、上述の小笠原氏の三代目の息子です。名を小笠原長秀ながひでといいます。長秀は京都で義満の側近として仕えており、義満の信任が厚かったため、あらたな信濃守護に任じられて、信濃に下向することになります。

長秀はバサラであつたらしく、信濃下向時には相当に派手な行列を組んでいたようです。バサラとは、旧来の権威や価値観を軽視し、粋と派手さを好む人物を指します。そうした人物が、信濃という地方に京の風情をひけらかしてやってくるわけですから、在地領主達の反発する情景が目に見えそうです。長秀としては、初対面で在地領主達の度肝を抜いて高圧的に事を進めれば、彼らを押さえ込めると考えていたようですが、これは完全に裏目に出ます。

大塔合戦

小笠原氏の勢力は、もともと信濃の北東部には及んでいませんでした。そのため、長秀が最初に標的にしたのが、信濃の北東部です。そして、この地における中心的な勢力が、村上氏むらかみでした。第五十九回の砥石城といしで、武田信玄を2回も打ち破った村上氏の先祖です。村上氏は、鎌倉幕府滅亡後の残党を掃討する戦いで、朝廷から「信濃惣大将」の称号を下賜されていました。しかし、働きに比するだけの荣誉、例えば信濃守護職を賜ることもなかったため、中央政権に心服していない勢力でもありました。

村上氏を中心とする信濃北東部の在地領主達は、長秀の着任の際に一応下手に出ていましたが、長秀の態度があまりに傍若無人だったために、長秀と戦うことを決めます。時に1400年です。戦いは、善光寺平南部の横田よこたに長秀が布陣したところから始まりました。この戦いを大塔合戦と呼びます。

長秀の下に集まったのは800騎です。1騎が数人を引き連れるので、総勢は3千~4千というところですが、対する在地領主連合側は、3千3百騎以上、総勢1万3千以上という兵力に達しました。

圧倒的な不利を悟った長秀は、横田方面での戦いを諦めて、そこから南西側にある味方の籠もる塩崎城しおざきを目指しました。しかし、在地領主連合側に阻まれ、激戦の末に長秀が手負いで塩崎城にたどり着いたときには150騎になっていました。また、長秀方の他の300騎は長秀達から分断され、近くに在った廢城おおとうの古城こじょうに逃げ込むことになりました。既に廢城になっていた城に何の準備もなく逃げ込んだ軍勢の劣勢は明らかで、籠城20日以上に及んで、生き馬を殺して食するまでになりました。最後は討ち死に覚悟で攻城軍に突撃し、玉砕したと伝わります。この時の戦いは凄惨を極め、攻城軍側の将の中には、悲惨な光景を目の当たりにして戦後に巡礼の旅に出た者がいるほどでした。

大塔合戦の後

塩崎城への攻撃も続き、長秀の命運も尽きかけた頃に、信濃に先に土着していた同族による仲介が入って長秀の命は助かり、長秀は京都に逃げ帰ります。在地領主達が幕府肝いりの守護を完膚なきまでに叩いて任国を追い出すという前代未聞の事件の後しばらくして、信濃には守護が置かれないことになりました。合戦から25年後によく小笠原氏が守護に返り咲き、一時的に信濃を平らげますが、その小笠原氏が分裂の末に相争うことになります。結局、信濃はまとまりを欠いたまま、戦国時代に突入することになりました。ここから先は、第五十九回の砥石城の時代に繋がっていきます。

大塔の古城はどこ？

実のところ、大塔の古城があった場所は確定されていません。長野市篠ノ井大当地区だと推定する説が古くからありますが、この説の根拠は、ぶっちゃけ、地名の読み仮名が大塔おおとうに似ているからというだけです。平坦な湿地帯だった地区のため、そんな所で20日以上も持ちこたえられないだろうと言われてます。そこで、現在では、近くの丘陵の中腹に在る二ッ柳神社ふたつやなぎか湯ノ入神社ゆのいり、或いはその両方だったのだろうと言われてます。それぞれ、二ッ柳城なつめ、夏目城という古い城が在った場所です。

ところで、夏目城にいた夏目氏は村上氏の庶流です。文豪夏目漱石の先祖だと言われており、今では、それを伝える石碑が湯ノ入神社に建っています。近くに川柳將軍塚古墳せんりゅうしょうぐんづか（善光寺平で2番目の規模の前方後円墳）もありますので、超マニアックな歴史好きの方は、一度訪ねてみてはいかがでしょうか。